

夢・努力・感動 ～生徒とともに～

みなさん、こんにちは。人権・同和教育部です。今年も残すところあとわずかとなりました。3年生の中にはすでに進路が決定している人も少なからずいますが、大多数の人は来年1月の共通テストをはじめ、受験本番に向けて勉強に余念がないことでしょう。コロナウィルス感染症については引き続き警戒を要する状態なので、体調管理とともに感染防止にも十分気を付けてください。

さて、今回の人権・同和教育部よりは2学期に行われた人権・同和教育HR活動、3年生対象の講演会の2点について振り返ってみたいと思います。

人権・同和教育HR活動

10月22日(木)「結婚差別について」
○HR活動の内容(グループワークあり)

- ・「平成28年度島根県人権問題県民意識調査報告書」の資料から、現在でも島根県民の中に差別意識が残存していることを知る。
- ・結婚差別の事例を通して、両親が結婚に反対した理由や背景、自分が結婚を反対されたらどう説得するか考える。
- ・今後、結婚差別事象をなくすために誰が、どんな立場で、具体的にどのようなことをすればよいかを考える。
- ・2016年施行の「差別解消推進法」成立の経緯と目的を知る。

○生徒の皆さんの感想文より

- ・今まで私の身近で聞いたことがないので、部落差別がいまだにあることがあまり実感できませんでした。しかし、今回の授業で使われた資料などを見て、差別意識を持っている人の割合が想像以上に多くて驚きました。私が一番気になったのが、結婚差別の事例で「私たちはいいけど」という親の言葉です。本当にそう思っているなら結婚を反対しないはずなので、口ではうまいこと言っても心の底には差別意識があります。私たちも頭で差別はいけないと理解するだけでなく、行動する勇気が大事だと思いました。
- ・今回の事例を考えると「もし自分が差別される側だったら」、「自分が結婚の当事者だったら」など自分の事に置きかえて考えることで、いっそう理解が深まりました。また、グループでの話し合いを通して自分の意見に人の考え方がプラスされて自分の考え方も広がったように感じました。同和教育に関する授業で毎回思うのは「差別は誰も幸せにしない。する方もされた方も傷つくだけだ」ということです。
- ・人権・同和教育を受けていない親世代より上の人の中には、「なんだかよく知らないけど、同和教育問題は怖い」とか「部落出身の人にかかわってはいけない」などの固定観念が刷り込まれているのかもしれないと思いました。まず親世代の意識を変えることが大切なので、私たちのようにきちんと教育を受けている世代が率先して意識を変えるよう行動することが必要だと思いました。

3年生対象 人権・同和教育講演会

演題 「生きるということ」 講師 三浦成人さん 日時 12月8日(火)

本校では例年、「源氏螢の会」代表の三浦成人さんに高校3年間の人権・同和教育のまとめとして、3年生対象の講演会をお願いしています。三浦さんは中学校・高校を中心に、県内外を問

令和2年12月21日(月)
人権・同和教育部より
3年生徒・保護者版



わず毎年多くの講演会活動を行っておられます。今回はコロナ対策のため、本来1回だけの講演会を2回に分けて実施していただき、本当に頭が下がる思いで胸一杯でした。講演会では、三浦さんご両親のエピソード、三浦さんご自身の壮絶な被差別体験、三浦さんの生き方を変えるきっかけとなった大学時代の友人との思い出など、涙を流して聞き入っている人もいました。

以下に、印象に残った言葉をいくつかあげてみます。

生まれた場所だけで差別されるということについて、みんなどう思うか。

「差別がある」ではなく、「差別をする人がいる」のである。

私も以前は差別に立ち向かわず、差別から逃げようとするかっこ悪い卑怯な人間だった。

人から恩を受けたらその気持ちを忘れず、それを返せる人間になりたい。

今年はコロナでみなさんも本当に大変だったと思う。しかし、その経験は必ず後から生きる。

「今まで生きてきた中でこのような差別を感じたことがないので、人権HR活動で学習する内容に実感がわかなかった」という人も、「小中高を通して様々な人権問題について習ってきたおかげで、今日の講演会の内容を理解することができた」ようで、「差別は現実に残っており、何もせずに放っておけば自然になくなるような簡単なものではない」ことも分かったと思います。

三浦先生には来年度以降も、大社高校生のために「生きるということ」について講演会を通して教えていただきたいと考えています。

○生徒の皆さんの感想文より

- ・中学校以来たくさん同和教育について勉強してきた、知識はついていると思っていました。しかし、今回三浦さんの体験談や思いを聞いて、自分が考えていたことはすごく甘かったと考えさせられました。「差別はいけない」と口で言うのは簡単ですが、三浦さんが体験してこられたような場面できちんと行動することができるのかと考えると、相当な勇気が必要だと思いました。体験された痛みを分かち合うことはできませんが、三浦さんのお話を今後生かしていくことで同じような思いをする人がいなくなれば良いと思いました。
- ・三浦さんは、「困っている人がいたら助けるのは当たり前」、「感謝すべき人には、後悔する前に思いを伝えなさい」と話されました。これらの言葉がとても心に響き、これまで自分を支えてくれた家族や友人など周りの人の姿が浮かびました。これからの人生で感謝することを忘れず、多くの出会いを大切にしていきたいです。
- ・差別をする人はたいした知識もなく、周りに流されて差別しているのだと思います。三浦さん本人やご家族、友人の方は差別に屈することなく立ち向かっておられることに感動しました。私も「自分が正しいと思ったことを貫き」、「自分らしく生きる」ようにしたいです。

最後に

島根県で現在のように学校教育の場で同和教育に力を入れるようになったのは、1980年代半ばに島根県出身の男性Aさんが大阪府において結婚差別事件を起こしたことがきっかけでした。Aさんは大阪で知り合った部落出身のBさんと交際し、結婚を約束しました。しかし、人権HR活動の事例のように家族に結婚を反対され、差別意識を吹き込まれてから結婚を白紙に戻したあげく、最後は「今の世の中では、部落差別はしかたない」などの差別的な発言をするに至りました。Bさんはショックのあまり自殺を考えられたこともあったそうです。その後の聞き取り調査でAさんは、中学・高校時代を通じて「同和教育を学んだ記憶がない」と答えたそうです。加害者Aさんとその家族は、正しい知識と差別を許さないという人権意識を持たなかったゆえにいつしか間違った情報から偏見を持ち、差別をする側になってしまったのです。人権HR活動や3年生対象講演会の感想文では、同和教育(部落差別)に対して「将来自分がかわる問題」として差別の「不合理さ」を認識し、「差別解消」のために「行動したい」という声が多数でした。大社高校は他県に進学・就職する人の割合が圧倒的に多くなるのが例年の動きです。卒業後は今まで学んだことをもとに、全国どこに行っても、問題ありと思われる場面に遭遇したときは、適切な行動を取って欲しいと思います。

森山祐司(数学科) 今岡雅卓(国語科) 水師敏樹(地歴・公民科)